

一般演題

演題1. 糖尿病教育入院患者56名の口腔内状況と問題点

○栃内 圭子, 阿部 晶子, 相澤 文恵,
杉浦 剛, 岸 光男, 稲葉 大輔,
米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

目的：糖尿病患者について口腔内状況と歯科保健行動を調査し、それらの実態を明らかにすることを目的とした。

方法：平成18年3月から平成20年1月まで、岩手医科大学附属病院で糖尿病教育入院に参加した143名中、口腔診査を希望した56名について、口腔自覚症状、歯科保健習慣についての質問紙調査後、口腔診査を実施した(受診率39.2%)。分析は40歳以上の53名(平均年齢59.9±10.6歳)について行った。分析対象者を40~59歳(28名)と、60歳以上(25名)の2つの年齢階級に分け、現在歯数、歯周ポケットを有する者の割合、歯科保健習慣の有無、を全国データ(平成17年歯科疾患実態調査または健康日本21中間評価指標値)における同等の年齢階級と比較した。また、対象者における歯周ポケット所有状況と自覚症状の有無および糖尿病病歴期間との関連を分析した。

結果：対象者群と全国値の比較において、平均現在歯数に差は認められなかった(40~59歳;対象者24.8, 全国25.3;60歳以上;対象者18.9, 全国16.8)にもかかわらず、歯周ポケットを有する者の割合は、両年齢階級で対象者の方が有意に高かった(40~59歳;対象者60.7%, 全国:41.5%;60歳以上;対象者84.0%, 全国:46.7%)($P < 0.05$, カイ二乗検定)。良好な歯科保健習慣をもつ者の割合は全国値より低い傾向にあり、特に清掃補助器具の使用について顕著だった。また、分析対象者中で何らかの自覚症状を持つ者と歯周ポケットを有する者は一致していた(ϕ 係数 = 1.00)。

考察：対象とした糖尿病患者群で歯周ポケットを有する者が多く、必ず自覚症状を伴っているにもかかわらず良好な歯科保健習慣を持つ者は少ないことから、糖尿病患者に対し歯科健診を実施し、口腔への自覚を促すことが歯科保健行動の強化につながる可能性が示唆された。

演題2. 造血幹細胞移植患者に対する口腔ケアへの取り組み

○阿部 晶子, 有原 和子*, 國安 那月*,
高橋美枝子**, 関根真理子*, 水城 春美***,
米満 正美

岩手医科大学予防歯科学講座, 岩手医科大学附属病院薬剤部**

岩手医科大学附属病院歯科医療センター歯科衛生部**, センター長***

目的：造血幹細胞移植時には、前処置に放射線照射や化学療法を行うために、様々な副作用が発現する。その中でも口腔内における副作用は高い頻度で発現する。岩手医科大学附属病院血液内科では、平成16年から歯科医師、歯科衛生士が、移植チームの一員として移植患者に対する早期からの口腔ケアを行っている。今回は、Oral Assessment Guide を評価基準とし、口腔ケアを行った経過を、症例を通して報告する。

対象・方法：平成18年1月から平成19年9月に岩手医科大学血液内科において造血幹細胞移植を受けた者19名(男性10名, 女性9名, 平均年齢32.7±11.4歳)を対象とした。この19名に対し、移植前からOral Assessment Guide を用い、口腔内状況を評価し、移植のための口腔内環境を整え、セルフケアの指導を行った。前処置開始後は、ベットサイドで口腔内評価を行い、症状発現時には、我々が作成した口腔ケアガイドラインに従い口腔ケアを行った。

結果：Oral Assessment Guide のすべての評価項目でスコアの最大が2の者は16名(84.2%)で、スコア3が認められた者は3名(15.8%)であった。移植期間を通じて、スコア1、つまり症状が発現しなかった者は認められなかった。また、スコア3と評価した頬粘膜、口唇部位も、口腔ケアガイドラインに従い口腔ケアを行ったところ、広範囲に移行することなく限局した状態で治癒に至った。また、19名の口腔内症状の平均発症期間は、19.4±9.8日であった。

まとめ：造血幹細胞移植患者に対し、Oral Assessment Guide を用い口腔内の評価を行い、口腔ケアガイドラインを作成し、それに従い口腔ケアを行った。その結果、Oral Assessment Guide を用いたことにより、口腔内の状態を客観的に評価することができた。また、口腔ケアガイドラインに従って口腔ケアを行ったことで、処置の標準化を計ることができた。

今後は、評価法も含め、洗口剤、塗布剤の口腔ケア

ガイドラインをさらに検討し、造血幹細胞移植のチーム医療の場において活用していく予定である。

演題3. ベトナム医療援助への参加経験
—ベトナムの口唇口蓋裂治療の現状について—

○飯島 伸, 杉山 芳樹

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

近年のベトナム社会主義共和国の経済発展が著しい。現在は人口8400万人増加率は1.2%で、毎年100万人増加している。GDP成長率は8.5%で右肩上がりの発展を見せている。そして、各医療現場も発展している。一方、口腔外科医不足や患者の経済的理由から口唇口蓋裂治療体制の整備は先進国に比べ十分とはいえない。そこで、日本口唇口蓋裂協会では、外務省の日本NGO支援無償資金協力事業として、同国に対し医療者を派遣し、口唇口蓋裂などの先天的口腔疾患への医療活動、技術指導を行っている。今回、同協会の依頼で平成19年1月16日から27日、11月27日から12月6日に、ホーチミン市、ファンティエット市およびチャービン省で医療活動を行ってきたので、その概要を報告した。

今回は私が合流した東京歯科大学チームとカナダDALHOUSIE大学チームの二チームで医療活動を行った。

スケジュールは各病院4日間で初日が回診、手術予定の立案、オペレーターの決定などを行った。2日目から4日目にかけて手術を行った。一日9例程度の口唇口蓋裂手術を行った。のべ4つの施設で行ったので、100例程度の手術を行ってきた。この二回のミッションでは、事故もなくすべての手術が順調に行われ、結果的にも満足がいくものとなった。

今後もミッション参加を続け、将来的には岩手医科大学歯学部でチームを組み独自チームとして参加することが望まれる。

演題4. メラニン色素沈着を伴った扁平上皮癌の二例
:免疫組織学的分析

○三上 俊成, 笹森 傑*, 古内 秀幸*,
杉山 芳樹*, 武田 泰典

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座, 口腔外科学第二講座*

緒言:メラニン色素の沈着を伴った扁平上皮癌の二例を経験したので組織学的分析を加えて報告する。また、悪性黒色腫で発現している癌抑制遺伝子 Wt1 (Wilms' tumor 1) の免疫染色法を用いた認識で、メラニン沈着を伴った扁平上皮癌と悪性黒色腫との鑑別が可能か否か検討を行った。

症例1:患者は49歳女性で主訴は口底部の腫瘤。色素沈着とピラン、発赤を伴っていたが、明らかな腫瘤や硬結は認めなかった。検査所見で特記すべき所見はなく、臨床診断は色素沈着の疑いだった。組織学的所見では著しく異形を呈した腫瘍細胞と色素含有細胞が混在していた。特殊染色により色素はメラニンと同定され、腫瘍細胞に混じってメラノサイトが増殖していた。病理診断は色素沈着を伴った扁平上皮癌であった。

症例2:患者は40歳男性で、主訴は舌のびらん。左側舌縁部にびらんを認め、硬結を触知した。Gaシンチで舌に異常集積がみられ、臨床診断は舌癌だった。臨床的な色素沈着はなかった。組織学的所見では粘膜上皮に色素沈着はなかったが、浸潤した腫瘍胞巣内に著しい色素沈着を認めた。特殊染色により色素はメラニンと同定され、腫瘍細胞に混じってメラノサイトが増殖していた。病理診断は色素沈着を伴った扁平上皮癌であった。

悪性黒色腫で発現している癌抑制遺伝子 Wt1 で免疫染色を行ったところ、悪性黒色腫の標本では陽性を示したが、本症例ではいずれも陰性であった。

結論:色素沈着を伴った扁平上皮癌の二例で、腫瘍細胞に取り込まれたメラニン色素の沈着が明らかになり、メラニンの分布は病変部に限局していた。悪性黒色腫もメラニン沈着を伴った扁平上皮癌も、ともにメラノサイトの増殖をみる悪性腫瘍であるが、癌抑制遺伝子である Wt1 はポジティブコントロールの悪性黒色腫でのみ強く発現していた。Wt1 による免疫染色は悪性黒色腫および色素沈着を伴った扁平上皮癌の鑑別に有用であることが示唆された。